

11月5日(火)19時～20時
会場: 国立国際医療研究センター
研修棟4階 セミナー室3, 4

今月の話題 糖尿病 (11月14日は世界糖尿病デー)

「糖尿病と癌: 最新の話題」(15分)

「膵島移植について」(15分)

それぞれ質疑を15分を行います

話題提供者

能登 洋
霜田雅之

第一内分泌代謝科医長
膵島移植プロジェクト長

NCGMメディアセミナーとは?

当センターが取り組む健康・医療の課題を広く共有するために開催しています。専門家からの情報収集、不明事項の確認の場、また、医療に関わる専門家がメディアの方の質問から学び、視野を広げる場とすることが目的です。質問・取材の中で必要なデータや写真等のご希望がありましたら、随時お問い合わせください。可能な範囲で対応させていただきます。

メディアセミナー事務局:
電話 03-3202-7181 ex 5684
メール mkishimo@hosp.ncgm.go.jp



講師略歴(能登 洋)

1993年(平成5年) 東京大学医学部医学科卒業
同年 東京大学医学部附属病院内科研修医
1994年(平成6年) 米国ニューヨーク州ベス・イスラエル医療センター内科研修医
1997年(平成9年) 東京厚生年金病院内科医員
1998年(平成10年) 東京大学医学部糖尿病代謝内科医員
2003年(平成15年) 米国テキサス州テキサス大学サウスウェスタン医療センター 内分泌代謝内科臨床フェロー
2006年(平成18年) 東芝病院代謝内分泌内科医員
2009年(平成21年)より 国立国際医療研究センター 糖尿病・代謝・内分泌科医長

用語や話題の解説

近年、糖尿病とがんの関連性が国内外で注目されています。がん死の多い日本では、糖尿病においてもがんは死亡の主因です。糖尿病・がんともに増加しつつあり、特に高齢者において増加が著しい状況です。両者とも日本の社会において影響力が一層増大しています。

国際的には、糖尿病ではがん全般・肝臓がん・子宮体がん・膵臓がん・腎臓がん・大腸がん・膀胱がん・乳がん・胃がんの発症リスクが増加しており、日本人に限定したデータでも、癌全般、特に肝臓がん・膵臓がん・大腸がんの増加を認めています。糖尿病ではさまざまな機序を介して癌のリスクが増加することが示されています。糖尿病治療薬に伴う発がんの可能性についても研究が進んでいますが、現時点ではいずれの薬剤についても結論には至っていません。当センターでは疫学的・遺伝子的アプローチで研究を進めています。

このような状況を受け、2013年に日本糖尿病学会と日本癌学会から以下の日本国民向けのメッセージが共同でなされました。

- ・食事療法、運動療法、禁煙、節酒は、糖尿病の人にとってがんの予防につながる可能性がある。
- ・糖尿病の人は性別・年齢に応じて適切に、科学的に根拠のあるがん検診を受診することが推奨される。
- ・特定の糖尿病治療薬とがんとの関係については、現時点でははっきりした結論は得られておらず、医師の指示に従って、良好な血糖を維持することが大切である。

講師略歴(霜田雅之)

平成10年3月 京都大学医学部卒業
平成10年～ 臨床外科医として勤務
平成16年4月 京都大学大学院医学研究科肝胆膵移植外科 大学院
平成19年9月 アメリカ ベイラー医学研究所 研究員
平成24年4月 国立国際医療研究センター研究所 膵島移植プロジェクト プロジェクト研究長

用語や話題の解説

「膵島移植」は、インスリン注射治療で血糖値が安定しない1型糖尿病患者さんに対する有効で新しい治療です。自分のインスリンが枯渇してしまった患者さんに、脳死もしくは心停止となったドナーの方から膵臓を提供していただき、特殊な方法でばらばらにしてインスリンを分泌する細胞だけを回収して、血管内に注入して移植するものです。現在日本ではその有効性と安全性を確かめる臨床試験が行われていて、近い将来に標準的な治療になることを目指しています。今年10月には日本で初めての「脳死ドナー膵島移植」が実施され、今後広まっていくことが期待されます。

問題点としては、技術的な点と社会的な点があります。技術面では、膵臓をそのまま移植する「膵臓移植」と比較すると、安全性は優れていますが、有効性がまだ低いことがあります。また、他の移植医療と同様に、生涯にわたって免疫抑制剤を服用する必要があります。社会面としては、特に日本ではドナーの数が大変少ないという点があります。将来技術面が改善されると、希望する患者さんが増えることが予想され、ますますドナー不足が問題になると考えられます。また体制面としては、膵島移植は臓器移植法に規定されていないので、現在組織移植として行われています。この影響で、特に脳死ドナーの場合には他の臓器の移植よりも手続きが複雑になっています。海外、特に米国や欧州ではドナー数も多く、システムも整備されていて、より多くの患者さんが治療の恩恵をうけることができています。